

# 2022年5月25日 園内研修 ふりかえり 対話者：浅井幸子氏（東京大学大学院）

異質な他者との対話により、

園の実践理論を実践から言語化し、再構築していく。

研修の目的

本園の教育哲学である「こどもスタートの教育」実践の周辺にはどのような事象が存在するのか、実際に教育実践をする中で変わりつつある自分自身を省察しコミュニティでの対話を重ねる中で、今まさに起こっている現象について言語化し語り合うことで意味を生成する

参加者

浅井幸子 教授（東京大学大学院）

奈良教育大学附属幼稚園教諭 1名（オンライン参加）

本園教諭 8名

## 0 | 保育実践 保育参観

## 1 | 自己紹介

- ・現在、研究課題について考えていること、取り組んでいること、悩んでいることを一言で

## 2 | 今年度の研究の背景とこれまでのプロセス（研究主任）

2020

「こどもスタートの教育」における育ちの履歴からデザインした教育課程  
—子どもの声から子どもと協働してカリキュラムを立ち上げていく保育思想

2021

「対話」と「ひらく」を方法として取り組んだ研修デザイン

2022

「こどもスタートの教育」実践を取り巻く営みと  
その周辺との関係性について

### \* 動的な複雑性の理解

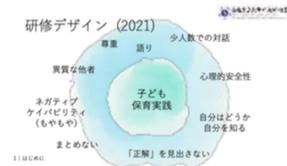
- \* バラバラにある思想をどう全体像として有機的にリンクさせるのか  
—全てを丁寧に対話するのは不可能  
伝統的に実践してきたことの意味を整理し、再設計するには

## 3 | ラウンドテーブル

- ・今年度、「こどもスタートの教育」を取り巻く現象について、各々が意識して取り組んだことについて対話する。
- ・実践を軸とし、研究副題である「記録」「研修」「会議」「社会（保護者）」について言語化する。

## 4 | 浅井先生より

## 研修デザイン



## 資料一覧

- (研究部) 研究の歩み  
指導案とは何か—指導案デザインの検討
- (指導部) 異年齢活動とは何か  
「異年齢」の新しい意味づけ
- (教育実習部) 学生との対話と指導のあり方
- (その他) 保育参観・参加・懇談の意味 スタンス  
共に園を支える保護者との対話

## (当日指導案デザイン)

## 対話内容 抜粋

実践では対話を大切にするけれど  
教育実習では「指導」になるのは何故か

- ・ 対話での問い直しが園内で進んできている中、  
「研究保育ってなんのため？」 「教育実習ってなんのため？」  
→打ちのめされて終わった経験にしてよいのか？  
できれば保育の楽しさ、一人でも多く幼児教育に携わる人を  
増やしてほしいと思う。
- ・ 学生から私たち教員が問い直され、共に幼児教育を考えてい  
ける仲間となる可能性を考えていきたい。

子どもとは「人與人」の対話の姿勢が培えて  
きたけれど、相手が保護者になると「教師と  
保護者」になるのは何故か？

- 子どもと教師は、共通して関わる対象がある。  
保護者と教師は、第3項が「子ども」になり、子どもが媒介  
しても対話が難しくなる。  
子どものビジョンで擦り合わせるのは難しいので、具体的な  
姿で共有していくほうが契機になるのではないかと。



記録は誰のために？何のために？

- ・ 記録は読み返すのか？経験として積み重なって良くなるのか？  
→何をもって「良くなる」とするのか。  
その時の自分の省察の記録なので見返しているかどうかは人によ  
る。
- ・ D.D.(Daily Dialogue)を実施するようになって、週の記録の  
表現が変わった。誰かに見せるためのものではなくなった。
- ・ 日本の教育では、課題を共有する文化だった。ネガティブな  
ことを克服する面から子どもが生み出しているものに目を  
向けてもいいのではないかと。それを可能にする記録と共有の  
仕方とは。

今、ここでの育ちを踏みとどませるということ

- ・ できないことができるようになることも確かにある。  
でも、その子どもの最大限の可能性を、今しかできない発見を、  
「楽しかった」という無難な感想を身につけさせるのではなく、  
その子どもが自分の経験をくぐらせた言葉で語れるように  
していきたい。
- ・ 幼児はどうしても、「早く」「大きく」を求められる存在。  
そこを、今、ここで何が育っているのか、  
彼・彼女にしかできない対象との出会いを丁寧に大切にしたい。